

「ナラセル」の解釈学

— 「シャバラ注」における bhāva, kriyā, bhāvanā —

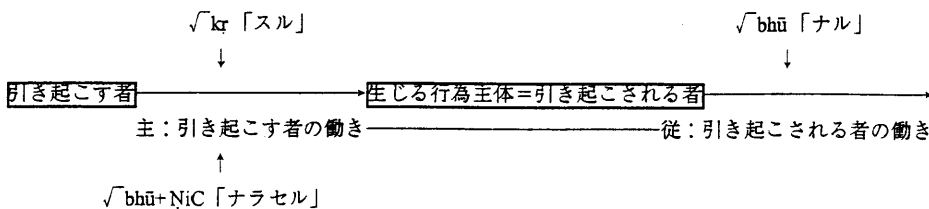
片岡 啓

I. ナル, スル, ナラセル

「ナル」「スル」「ナラセル」という三つの表現を考えてみよう。「ナル」は何かが自然とそうナル, 「スル」は何かを意図的にスル, 「ナラセル」は何かがそうナルようにスルと考えられる。或いは, 「ナル」は状態の変化, 「スル」は対象へ向かう行為, 「ナラセル」は対象に変化をもたらす使役行為を表すとも言える。それぞれを, 自動詞, 他動詞, 使役動詞の典型例と捉えることもできよう。

サンスクリットで, この三者に相当するのは, bhavati (生じる), karoti (作る), bhāvayati (生じさせる) — 名詞形は, bhāva (生じる働き), kriyā (作る働き), bhāvanā (生じさせる働き) — であり, それぞれの動詞語根 (幹) である $\sqrt{bhū}$, \sqrt{kr} , $\sqrt{bhū}+NīC$ は, akarmaka-dhātu (行為対象を持たない動詞語根), sakarmaka-dhātu (行為対象を持つ動詞語根), nijanta-dhātu (使役動詞語根) の典型例と見なしよう。

聖典解釈学者クマーリラ (後七世紀前半) は, このような三分類を前提とした上で, 「ナル」の意味を「行為主体それ自体の獲得一般に過ぎない働き」¹⁾, 「スル」の意味を「*自体を獲得した行為主体が持つ, 他者の自体獲得を対象とする働き」²⁾ (左上の記号*は対応するサンスクリット原文を基に筆者が再構成したことを示す) と規定する。そして, スルの行為対象は, ナルの行為主体であるとする³⁾。このように, ナルとスルの関係を規定した後, 彼は, 更に一般的に, ナル・スル・ナラセルの相互関係, 構造を明確にしようとする。即ち「ナル」は<引き起こされる者の働き>(prayojya-vyāpāra), 「スル」は<引き起こす者の働き>(prayojaka-vyāpāra)⁴⁾, 「ナラセル」は<引き起こされる者の働きを従属要素とする, 引き起こす者の働き>を表すとする⁵⁾。彼が予想する図式は以下となる。



クマーリラが, このような構造を明らかにしたのはナラセルを強調するためであった。即ち, 聖典解釈学者/祭祀行為研究者である彼は, 全ての動詞の原型を, 「ナラセル」と理解する。それ故, 「坐る」 (< $\sqrt{ās}$ >) や「寝る」 (< $\sqrt{śi}$ >) といった自動詞も, 彼によれば<引き起こされるもの>として楽や快適さといった目的を有しよう⁶⁾。言い換えると, 聖典解釈学において全ての動詞は「ナラセル」型に引きつけて解釈される。

複注釈者クマーリラが、このような三者の構造及びナラセルの強調についての問題意識を有したのは、彼に先行する注釈者シャバラ（後六世紀前半）の準備があつたことと思われる。本稿の目的は「シャバラ注」(ŚBh)における、bhāva, kriyā, bhāvanā 概念の検討を通じて、ミーマーンサー思想史上のシャバラの位置を明らかにすることにある。結論を先に示すと以下となる。

1. シャバラは bhāva, kriyā, bhāvanā を互換可能なものとして併用する。即ち、ナル・スル・ナラセルという三者の構造(スル+ナル=ナラセル)についてクマーリラのような明確な意識を持たず、祭式分析における要素としては同じ役割を果たすものとして三者を扱っている。
2. 聖典解釈学者／祭祀行為研究者であるシャバラは、祭式という出来事／行為の中に目的を読みとり、ヴェーダの規定文をそれに沿って読み換えた。即ち、シャバラの祭式観・世界認識は、目的指向性を持ち、それが聖典の解釈に反映する。その際、祭式観と聖典解釈は、それぞれ、祭式内諸要素の連関構造明示と、ヴェーダ例文のパラフレーズという形で示される。
3. bhāvanā という表現を行為論に持ち込んだのは、現存する文献の中では「シャバラ注」が最初である。当時、行為を表す語として、文法学では、bhāva, kriyā が一般的であり、bhāvanā は用いられていないことを考慮すると⁷⁾、シャバラ、或いは、彼に遠く遡らない聖典解釈学者が bhāvanā 概念を持ち込んだことは、クマーリラによる bhāvanā 論確立とその後の発展から見ても、ミーマーンサー思想史上、及び、行為論争史上、重要と言える。

II. 先行研究

クマーリラの bhāvanā 論については、Frauwallner[1938]、Mazumdar[1977]、黒田[1979]・[1980]、D'Sa[1980]、川上[1994]があり、先行研究の少ないミーマーンサーの諸問題の中でも比較的よく研究されている分野と言える。但し、クマーリラの bhāvanā 論をミーマーンサー思想史上に位置付けるには、彼が注釈を施している「シャバラ注」の bhāvanā 論と比較・検討する必要があり、その作業は未だ十分に行われているとは言えない。D'Sa[1980] は、シャバラとクマーリラの言語論を扱った数少ない研究書であり、その中で、両者の bhāvanā 論も論じているが⁸⁾、Taber[1983]が批評しているように、シャバラの bhāvanā 論に関する彼の見解は、必ずしも適切とは言えない⁹⁾。例えば、彼は、śabda-bhāvanā(=śābdī bhāvanā) の概念をシャバラの bhāvanā 論の中に読み込んでいるようだが¹⁰⁾、その概念は、クマーリラに始まるものであり、シャバラの中には認められない。

このように、シャバラの bhāvanā 論研究は決して十分とは言えない。しかも bhāvanā 論がミーマーンサーという聖典解釈学／祭祀行為研究の中で中心的な位置を占めることを考えれば、ミーマーンサーの基本テキストである「シャバラ注」の中で、その概念を解明することは、必要不可欠な作業に思われる。

III. 問題領域

bhāvanā 論は、「ジャイミニ・スートラ」(JS) 2.1.1 への注釈形式をとって展開される。既にフラウフルナーが指摘しているように、スートラ全12課(adhyāya)を、第1、第2～6、第7～12に三分した場合、ミーマーンサー自身にとり最も重要なのは第2～6であり、その注釈冒頭で bhāvanā 論が説明されているのは、ミーマーンサーの体系内で bhāvanā 論が中核的な位置を占めることを示唆していると言える¹¹⁾。まず、本稿に関わる当該スートラの前半と、先行研究による英訳とを示しておく。

スートラ： bhāvārthāḥ karmaśabdās tebhyaḥ kriyā pratiyeta¹²⁾。

Cloony： The purpose of action words is making. From these action is construed¹³⁾。(スートラ研究内の英訳)

G. Jhā： Those 'words denoting action' (i.e. verbs) which denote *Bhāvanā* (activity), — from these proceeds the cognition of the accomplishment [of the resultant *Apūrva*]. (シャバラ注英訳内)

G. Jhā： All verbs are indicative of *Bhāvanās*, and the accomplishment of the *Apūrva* proceeds from these. (クマーリラ複注英訳内)

スートラでは、行為に関わる語として bhāva, karman, kriyā が用いられている。また、bhāvārthāḥ, karmaśabdāḥ の意味、構文上の関係も意見が分かれる。これに加え、「シャバラ注」では、bhāvanā, bhāvaśabdāḥ も用いられている。また、bhāva と bhāvanā との関係も問題となる。Jhāは、シャバラの解釈として、bhāva=bhāvanā としている。また、D'Sa[1980]も、シャバラの bhāvanā 論を扱う中で、bhāvārthāḥ = express an urge としている。実際には、スートラ中の bhāva- を bhāvanā- と解釈するのは、クマーリラに始まり、シャバラ自身がそう考えていたわけではない。以下スートラ解釈を巡ってシャバラが用いる諸表現 (bhāva-, kriyā, bhāvanā, bhāvārthāḥ, karmaśabdāḥ, bhāvaśabdāḥ) を整理した上で、bhāva, kriyā, bhāvanā の関係について論じる。

IV. 各概念の整理

1. <生じる働き> (bhāva)

クマーリラは、スートラの bhāva を使役動詞語幹 (生じさせる) からの派生語とし、<生じさせる働き>という解釈を導き出す¹⁴⁾。一方、シャバラにとり bhāva は、使役動詞語幹から派生されない。それは「生じる」(bhavati) という行為、働きを意味する (bhāve GHaÑ: P 3.3.18 bhāve)。そのことは次の二点から確認される。

或る [言葉] は <生じる働き> (bhāva) を意味するが^s、祭祀行為に関わる言葉ではない。

例えば bhavana, bhāva, bhūti というのが^s [そうである]¹⁵⁾。

列挙された三例は、文法的解釈の違いにより、行為 (kriyā)、或いは、幾つかの行為参与者 (kāraṅka) を意味しうる¹⁶⁾ が、共通する意味は、<生じる> (bhavati) という行為、働きである。また、次の言明がある。

「何かが生じる (bhavati) ように祭るべし」と。だからこれら (yajati 等) は <生じる働

き (bhāva) に関わる言葉>である¹⁷⁾。

ここで、bhāvaは、「生じる」という行為、働きの意味に解釈されている。以上から、bhāvaが、<生じるという行為>、<生じる働き>を意味することが確認された。(尚、以下では、祭祀行為 karman と紛らわしいので、「生じるという行為」ではなく、「生じる働き」で和訳を統一する。) 同時に、bhāvārthāḥ が<生じる働きの意味する [言葉]>であることも明らかとなった。それ故、シャバラの解釈として、bhāva=bhāvanā とするのは不適切である。

2. <生じる働きの意味する言葉> (bhāvaśabdāḥ)

<生じる働きの意味する言葉> (bhāvaśabdāḥ) についてはシャバラが明瞭に述べている。

「それらが動詞 (ākhyātāni) である」というように、同義語によって、<生じる働きの意味する言葉> (bhāvaśabdāḥ) を教示している¹⁸⁾。

即ち、動詞 (ākhyātāni) は、<生じる働きの意味する言葉> (bhāvaśabdāḥ) の同義語である。よって、<生じる働きの意味する言葉>と、<生じる働きの意味する [言葉]> (bhāvārthāḥ) とでは、その外延が異なる。即ち bhavana, bhāva, bhūti は<生じる働きの意味する [言葉]> (bhāvārthāḥ) であるが、<生じる働きの意味する言葉> (bhāvaśabdāḥ) ではない。動詞は全て、<生じる働きの意味する言葉> (bhāvaśabdāḥ) であり、<生じる働きの意味する [言葉]> (bhāvārthāḥ) でもある。

3. <祭祀行為に関わる言葉> (karmaśabdāḥ)

<祭祀行為に関わる言葉> (karmaśabdāḥ) は、動詞 (ākhyātāni) の同義語ではない。

或る [言葉] は<祭祀行為に関わる言葉>であるが、生じる働きの意味しない。例えば「シェーナ」「エーカトリカ」等である¹⁹⁾。

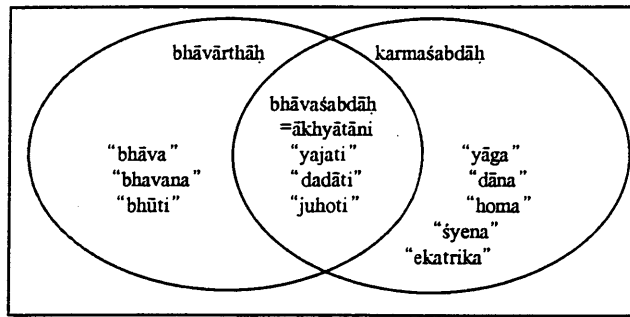
「シェーナ」「エーカトリカ」は祭名であり、祭式を指示する。それ故、祭祀行為とは、「祭る」(√yaj) 等という動詞語根の意味 (祭式等 yāgādi) となるので、祭式に関わらない日常的な動詞「料理する」(pacati) 等まで、<祭祀行為に関わる言葉>に含める必要はない。例えば、bhāvanā 論題、新得力論題に後続する箇所 (JS 2.1.6) で、シャバラの意図する動詞が次のように列挙される。

<生じる働きの意味する言葉> (bhāvaśabdāḥ) が、祭祀行為を表示することが理解された。

また、<生じる働きの意味する言葉>は多様である。「祭る」「献じる」「与える」という類のもの、及び「乳を搾る」「粉にする」「溶かす」等である²⁰⁾。

これらの動詞は全て、祭式に関わるものである。即ち、前半は、主要祭祀行為 (pradhāna-karman)、後半は、準備浄化行為 (samskāra-karman) を指している。よって、「祭祀行為」(karman) とは、ヴェーダ (或いはヴェーダに基づくもの) の規定文中の動詞語根の意味を指示し、祭式 (yāga)、及び、祭式に附属する様々な行為単位 (献供 homa、布施 dāna 等) を指示するものと定義できる。

以上述べた<生じる働きの意味する言葉> (bhāvaśabdāḥ = 動詞 ākhyātāni)、<生じる働きの意味する [言葉]> (bhāvārthāḥ)、<祭祀行為に関わる言葉> (karmaśabdāḥ) の関係は下図となる。



＜生じる働きを意味する〔言葉〕＞(bhāvārthāḥ)であり、かつ、＜祭祀行為に関わる言葉＞(karmaśabdāḥ)であるのは＜生じる働きに関わる言葉＞(bhāvaśabdāḥ)、即ち、動詞(ākhyātāni：特にヴェーダ規定文中の動詞)に限定される。これはシャバラによるスートラ(JS 2.1.1)前半部の解釈が以下であることを示す。

生じる働きを意味し、〔かつ〕、祭祀行為に関わる言葉であるもの、それら(動詞)から、＜作る働き＞が理解されるはずである。²¹⁾

この分類は、動詞(ākhyātāni)＝＜生じる働きに関わる言葉＞(bhāvaśabdāḥ)と、名詞(nāmāni)＝＜実体・性質に関わる言葉＞(dravyaguṇaśabdāḥ)による言葉の二分類とは視点が異なることに注意する必要がある。

4. ＜作る働き＞(kriyā)

bhāva が生じるという行為、働きを意味したように、kriyā は作るという行為、働きを意味する。次の言明がある。

だから、それら(「祭るべし」等)から、作る働き(kriyā)が理解されるはずである。果報を作る働き(kriyā)、〔果報を〕作る働き(karṇa)、〔果報の〕生起(niṣpatti)というのが²²⁾。

ここではbhāvaがbhavanaの同義語とされたように、kriyāはkarṇaの同義語とされている。また次の言明がある。

働き(vyāpāra)、作る働き(kriyā)というのは同義である。ここ(「新月満月祭により天界を望む者は祭るべし」)では、祭式によって天界を作る働きが述べられている。「祭るべし」(yajeta)＝「祭式により天界を作るべし(kuryāt)」＝「天界のために働くべし(vyāpriyeta)」という意味である²³⁾。

ここでは、kriyāがvyāpāraと同義とされた上で、kriyāが、作るという行為、働きを意味することが明らかにされている。

5. ＜生じさせる働き＞(bhāvanā)

bhāvaが＜生じる働き＞、kriyāが＜作る働き＞を意味したように、bhāvanāは＜生じさせる働き＞を意味する。

人と関係した生じさせる働き (bhāvanā) が述べられている。何故なら、人に対して「生じさせるべし」(bhāvayet) と語っているので²⁴⁾。

ここでシャバラは明らかに bhāvanā を、生じさせるという行為、生じさせる働きを意味するものとして解釈している。尚、シャバラは、スートラの bhāva を、生じる働きと解したため、当該注釈においては、動詞は生じる働きを意味し(bhāvārthāḥ)、それに基づいて、作る働き、生じさせる働きが理解されると考えている。

生じる働きを意味し、祭祀行為に関わる言葉であるもの、それら(動詞)から、<作る働き>が理解されるはずである。「祭るべし」等から。[問]何故か。[答]生じる働きを意味するからに他ならない²⁵⁾。 (下線はスートラ本文)

これら(「祭るべし」yajati 等)は祭式等に関わる言葉でもあり、生じる働きに関わる言葉でもある。これらからは、√yaj 等の意味(祭式等)も、「生じさせるべし」というのも理解される²⁶⁾。

しかし彼が、作る働き、生じさせる働きを動詞の間接表示対象と考えていたと結論するのも早急に思われる。何故なら、ŚBh 2.1.1 では、動詞が<生じる働き>を直接表示すると理解される表現 bhāva-arthāḥ, bhāva-vacanāḥ を用い、bhāvanā-vacanāḥ を用いなかったのに対し、bhāvanā 論が一旦確立されると、ŚBh 2.2.1 では、動詞が<生じさせる働き>を直接表示すると理解される表現 bhāvanā-vacanāḥ も用いているからである²⁷⁾。それ故、スートラの bhāva を素直に、<生じる働き>と解し、しかも、<作る働き><生じさせる働き>と併用した不整合がそこに表れたと見るべきであろう。このような欠陥に気づいていたからこそ、クマーリラは、スートラの bhāva を強引に bhāvanā と解釈したのである。

V. bhāva, kriyā, bhāvanā の関係・構造——連関構造明示とパラフレーズ——

以上で、シャバラが用いる各概念が整理された。そして、bhāva, kriyā, bhāvanā がそれぞれ、生じる働き、作る働き、生じさせる働きを意味することが明らかとなった。以下では、生じる働き、作る働き、生じさせる働きを、互換可能なものとしてシャバラが併用していること、及び、それらが内包する構造。即ち、祭式内諸要素連結の際にそれらが要求する関係を明らかにする。言い換えると、生じる働き、作る働き、生じさせる働きは、祭式、天界、新得力といった諸要素と一定の関係をもって連結される核であり、三者のいずれもが、同じ役割を交代可能なものとして果たしている。

始めに概要を説明する。シャバラが予想する例文は「天界を望む者は、祭るべし」(svargakāmo yajeta) である。動詞「祭るべし」(yajeta) は、祭式と生じさせる働き(或いは生じる働き・作る働き)を理解させる。そして、生じさせる働きは必ず、実現対象(sādhya)、実現手段(sādhana)、執行細目(itikartavyatā)を期待する。

動詞は<生じる働き>を主とする。何かを<生じさせる働き>を語っている。何故なら<生じる働き>の為に用いられる<実現手段(=行為参与者)の集合>(=実現対象・実現手段・執行細目)が予期されているので。「祭るべし」「何によって」「何のために」「どのようにして」と²⁸⁾。

まず、生じさせる働きは、「天界を望む者は」から理解された実現対象（天界）と結びつく。即ち、天界を生じさせる働きとなる。

「何かを生じさせるべし」と語るそれら（＝「祭るべし」等）は、「天界を望む者は」という語との関係に基づいて「天界を生じさせるべし」と語るはずである²⁹⁾。

これは、二語にまたがる関係であり、文 (vākya) レベルである³⁰⁾。

次に、実現手段として祭式が結びつく。即ち、祭式を実現手段とする天界を生じさせる働きとなる。

何故なら、この意味（祭式等）が規定されているので。例えば祭式等によって。「天界を望む者は何により天界を生じさせるべきなのか。」「祭式等によって」と³¹⁾。（下線はストトラ本文）

この場合、祭式と生じさせる働きとの関係は、一語内に収まり、明言 (śruti) レベルとされる³²⁾。

次に、現在の祭式と、未来の天界とを繋ぐ新得力が想定される。即ち、祭式が直接に生じさせるのは新得力とされる。よって、祭式を実現手段とする新得力を生じさせる働きとなる。

また言葉の意味（祭式等）により果報を実現するのは、それ（祭式等）により新得力を作ってからであって、それ以外の方法によるのではない³³⁾。

また、それぞれの連関構造明示に対応するパラフレーズが存在する。例えば、例文「天界を望む者は、祭るべし」の連関構造明示は、<祭式を実現手段とする天界を生じさせる働き>であり、パラフレーズは「祭式によって、天界を、生じさせるべし」(yāgena svargam bhāvayet) である。

このように、生じる働き等は、天界、祭式、新得力といった諸要素と一定の関係をもって結びつき、その際に連関構造明示とパラフレーズが対応する。以下では、これらを個々に検討し、生じる働き、作る働き、生じさせる働きが、互換可能なものとして用いられていることを示す。尚、本稿の趣旨からは、実現対象、実現手段との関係を示すだけで十分であるので、執行細目については触れない。

1. 「祭るべし」の表示対象

動詞「祭るべし」(yajati: pañcama-lakāra) は、二意味を直接表示する。即ち、動詞語根の意味である祭式と、生じる働き(bhāva)である。

これら (yajati 等) は、祭式等に関わる言葉でもあり、生じる働きに関わる言葉でもある。これらからは、√yaj 等の意味（祭式等）も、「生じさせるべし」というのも理解される。「何かが生じるように祭るべし」と³⁴⁾。

生じる働きに関わる言葉、即ち、動詞である「祭るべし」は、祭祀行為に関わる言葉であると同時に、生じる働きを意味する言葉でもあるので、祭式と生じる働きを直接表示する。また、「生じさせるべし」という形で、生じさせる働きも理解される。同じく、作る働きも動詞から理解される。

だからそれら (yajeta等) から<作る働き>が理解されるはずである³⁵⁾。

「祭るべし」から理解されるものを整理すると、以下のようになる。

「祭るべし」	→ 祭式+生じる働き	“yajeta”	→ yāga+bhāva
	祭式+作る働き		yāga+kriyā
	祭式+生じさせる働き		yāga+bhāvanā

この段階では、祭式と生じる働き等とが、どのような関係にあるのかは必ずしも明らかでない。この段階を文に表現したものととして、次のものがある。

「何かが生じるように祭るべし」(tathā yajeta yathā kimcid bhavati)と³⁶⁾。

これは、<祭式>と<生じる働き>とを文(複文)に表現したものであるが、その両者の関係(kriyā-kāraka 関係)は明示されていない。祭式+作る働き、祭式+生じさせる働きに関しては、祭式が、働きに対していかなる関係に入るかを明示することなしに文に表現することは不可能(=「祭式により作るべし」yāgena kuryāt, 「祭式により生じさせるべし」yāgena bhāvayetとなり、祭式が実現手段 sādhana であることが明示されてしまう)なので、この段階では、祭式+生じる働きのみがパラフレーズされる。

2. 天界

「祭るべし」から理解された<生じる働き>等は、特定の何かが生じる働き(2.1.1: kimcid bhavati), 何かを作る働き, 何かを生じさせる働き(11.1.24: bhāvanām kasyāpi brūte)である。祭式は、同一語(同一明言)から理解されるにもかかわらず実現対象(sādhya)としては働きに結び付きえない。そこで、次に文レベルにおいて、実現対象となるものが期待される。文レベルでは、「天界を望む者は、祭るべし」となるので、天界が実現対象として結びつく。即ち、次のようになる。(右は、対応する「シャバラ注」原文、及び、その箇所)

天界との関係(連関構造)

*天界が生じる働き	svargasyotpattiṃ (2.1.1); phalasya—niṣpattiḥ (2.1.1)
天界を作る働き	(yāgeneha) svargasya kriyā (11.1.10); phalasya kriyā (2.1.1)
*天界を生じさせる働き	bhāvanā ca phalasya(11.1.24)

*天界が生じる働き(*svargasya bhāvah), *天界を生じさせる働き(*svargasya bhāvanā)という表現は直接には「シャバラ注」に見い出されないが、右に挙げた対応表現から十分予想可能である。これらの表現は、天界と働きとの関係を明示しており、語意の連関構造を示すものとみなせる。各連関構造に次のパラフレーズが対応する。

天界との関係(パラフレーズ)

天界が生じる	(yāgāt) svargo bhavati (11.1.1); (tataḥ) svargo bhavati (6.1.3)
天界を作るべし	(yāgena) svargam kuryāt (11.1.10)
天界を生じさせるべし	svargam bhāvayet (2.1.1)

3. 祭式

次に、何から天界が生じるのか、何により天界を作るのか、何により天界を生じさせるのか、というように実現手段 (sādhana) が期待される。そこで、明言レベル (祭るべし) で理解された祭式が実現手段として働きに結び付く。この場合、祭式は、「果報 (=天界) が取り上げられて、祭式が規定される」(11.1.3: phalam uddīśya yāgo vidhiyate) と表現される。言い換えると、働きは、天界と結び付いて後に、祭式と結び付くのであって、天界との関係以前に祭式が規定されることはない。それぞれの連関構造は以下ようになる。

祭式との関係 (連関構造)

- *祭式に基づく<天界が生じる働き> yāgadānahomasambaddhāḥ svargasyotpattim (2.1.1)
- 祭式を実現手段とする<天界を作る働き> yāgeneha svargasya kriyā (11.1.10)
- *祭式を実現手段とする<天界を生じさせる働き> bhāvanāyāṃ trayo yajatyādaya (2.2.1);
bhāvanā ca phalasya (11.1.24)

表現は様々であるが、天界が生じる働き、天界を作る働き、天界を生じさせる働きに対して、祭式が実現手段として規定されているという構造は共通している。それぞれに次のパラフレーズが対応する。

祭式との関係 (パラフレーズ)

- 祭式から天界が生じる yāgāt svargo bhavati (11.1.1); tataḥ svargo bhavati (6.1.3)
- 祭式により天界を作るべし yāgena svargaṃ kuryāt (11.1.10); svargaṃ yāgena kuryād (11.1.3)
- 祭式により天界を生じさせるべし yāgena svargaṃ bhāvayet (11.1.24)

ここでは、生じる働き、作る働き、生じさせる働きのパラレルな構造が直接に表現されている。

4. 新得力

次に、新得力との関係を見る。新得力は、理論的祭式構築の際に不可欠な要素として、その存在が要請されるものである。それ故、新得力の存在要請に関する若干の説明の後に、連関構造明示を見ることにする。その新得力は、次のようにして理解される。

また言葉の対象 (祭式等) により果報を実現するのは、それ (祭式等) により新得力を作ってからであって、それ以外の方法によるのではない(nānyathā)。故に、その [言葉] から新得力が理解される。故に「それ (祭式等) を表示する [言葉] から新得力が理解される」と [スートラで述べられている] ³⁷⁾。

第一に「果報が取り上げられて、祭式が規定される」ことは、「祭式から天界が生じる」ことをヴェーダが約束することである。そして、ヴェーダから得られた知識は絶対に正しい。にもかかわらず、現実には祭式から直接に天界が生じるわけではない。そこで未知対象である新得力 (apūrva) が想定される。このような想定なしには、ヴェーダの祭式規定は無駄になってしま

うからである³⁸⁾。この新得力は、祭式から直接に生じ、天界を生じさせる³⁹⁾。新得力は「祭るべし」という規定以外によっては知られず、その意味で「新しい」(apūrva) ものである⁴⁰⁾。以上から「祭るべし」から新得力が理解されることが明らかとなった。但し、新得力は直接に表示されるのではなく催促・要請される。

故に、生じる働きに関わる言葉は新得力を催促する (codaka) と我々は言うのである。

しかし或る言葉が新得力を直接表示する訳ではない⁴¹⁾。

新得力は直接表示される訳ではないが、生じさせる働き (bhāvanā) を表示する文のレベルにおいて催促される。

その新得力についても、語意の連関構造を示す以下の言明が見い出される。

*祭式に基づく新得力が生じる働き

*祭式を実現手段とする新得力を作る働き apūrvaṃ tu tena [yajinā] kriyate (7.1.3)

*祭式を実現手段とする新得力を生じさせる働き yāgadānahomair viśiṣṭāpūrvasya bhāvanā (2.2.1)

対応するパラフレーズは（直接表示されない）新得力の性格上、実現されることはない。言い換えれば、新得力は、語意の連関上にのみ登場する対象である。

以上で、生じる働き等と、天界、祭式、新得力との関係が、連関構造明示とパラフレーズで示され、しかも、中心的な位置に、生じる働き等の三者が互換可能なものとして併用されていることが明らかとなった。

VI. 結びにかえて

結論は、冒頭に述べた通りであり繰り返さないでおく。今は、別の視点から、仮説も含め補足をを行い、残った問題点を指摘したい。

ミーマーンサー学派の行為論という枠組みの中で bhāvanā 概念の展開を捉えると、次のような流れが予想される。文法学の中で、動詞語根の意味 (dhātvartha) とは別に、行為 (bhāva, kriyā, karman) が立てられることはなかった。ミーマーンサー学派はある時点で、動詞語根の意味 (dhātvartha=karman) とは異なる行為を立てた。これは、祭式等を実現手段 (sādhana)、天界等を実現対象 (sādhya) と捉えることに因ると思われる。即ち、「祭式から、天界が、生じる」の「生じる」に見られる生じる働きを、動詞語根の意味とは別に立てる必要があった。これは、彼らが、祭式全体の中に、天界等という目的を読み込んだことに起因する。生じる働き、作る働きは、文法学からの流用が可能であった。しかし、生じる働き、作る働きが内包する「ナル」と「スル」の構造は、彼らの目的指向性を反映するには不十分であった。そこで、祭主の祭式によって天界が生じることまでも表現できる「ナラセル」が導入された。即ち、bhāvanā が持ち込まれた。この段階は、既に『シャバラ注』に認められる。そこでは、<スル+ナル=ナラセル>の構造は意識されておらず、生じる働き等は、同じ役割を果たす互換可能なものとして併用されていた。しかし、そのような併用は、スートラ解釈とのきしみを生じさせた。それは、文法学から流用された生じる働き、作る働きと、ミーマーンサーが要請した概念<生じさせる働き>との軋轢と見ることもできる。このような問題を解決したのがクマーリラである。即ち、

彼は、〈スル+ナル=ナラセル〉の構造を意識するとともに、三者の併用を改め、ナラセルへの一本化を図り、スートラの bhāva を bhāvanā と解釈することで、ミーマーンサーの学説体系を一貫化することに成功した。これを、ミーマーンサー独自の行為論確立と見ることもできよう。

<略号及び使用テキスト>

- A *Śrīmajjaiminipraṇītaṃ mīmāṃsādarśanam*. Ed. Subbāśāstrī. 6 vols, 7 parts. Ānandāśramasamskṛtagranthāvaliḥ 97. Ānandāśramamudraṇālaya, 1929-34.
- A' *Śrīmajjaiminipraṇītaṃ mīmāṃsādarśanam*. 7 parts. Ed. Kāśīnātha Vāsudeva Abhyamkara and Paṇḍita Gaṇeśaśāstrī Aṃbādāsa Jośī. Ānandāśramasamskṛta-granthāvaliḥ 97. Ānandāśramamudraṇālaya, 1970-76.
- JS *Jaiminisūtra*. See under A, A'.
- P *Aṣṭādhyāyī of Pāṇini, Translated by Sumitra M. Katre*. Delhi: Motilal Banarsidass, 1989.
- ŚBh *Śābarabhāṣya*. See under A, A'.
- TV *Tantravārttika*. See under A, A'.

(表記に関して、ŚBh ad JS 2.1.1 等の “ad JS” は省略した。また、ŚBh 2.1.1 の数字は、それぞれ、adhyāya, pāda, sūtra 番号を示す。)

(注記)

- 1) TV 2.1.1: iha kebhyaścīd dhātubhyaḥ parā tinvibhaktir uccāryamāṇā kartrātma-lābhāmātram eva vyāpāram pratipādayati yathāsti-bhavati-vidyatibhyaḥ. A, 376.27-28; A', part 2, 341.21-22.
- 2) TV 2.1.1: aparebhyas tu siddhe kartary anyātmalābhaviṣayavyāpārapratītiḥ. yathā yajati dadāti pacati gacchatīti. A, 376.28-29; A', part 2, 341.22-23. TV 2.1.1: yadā tu labdhātmako nyatra vyāpriyate tadā karotīty evam apadiśyate. …… tasmāl labdhātmakakartṛvyāpāravacanāni karotyarthavanty ākhyātāni. A, 377.4-7; A', part 2, 342.5-8.
- 3) TV 2.1.1: bhavatyarthasya kartā ca karoteḥ karma jāyate// A, 377.10; A', part 2, 342.11.
- 4) TV 2.1.1: karotyarthasya yaḥ kartā bhavituḥ sa prayojakaḥ / bhavitā tam apekṣyātha prayojyatvaṃ prapadyate // A, 377.24-25; A', part 2, 343.3-4.
- 5) TV 2.1.1: kadā cit punaḥ samānapadaikadeśopāttopasarjanibhūtaprayojyakriyah prayojakavyāpāro vivakṣyate. …… vācakatvena dyotakatvena vā nijaparaḥ prayujyate bhāvayati vikledayatīti ca. tathā cāha, prayojya-kartṛkaikānta-vyāpāra-pratipādakāḥ / nyantā eva prayujyante tatprayojaka-karmasu // A, 378.5-10; A', part 2, 343.14-17.
- 6) TV 2.1.1: anyad eva hi dhātvarthaprāpyaṃ karma sakarmake / anyad eva ca sarvatra pratyayārtha-nibandhanam // …… tac ca prāyenaivamkāmaśabdenaiva sambandham āpadyate. sukhakāma āsīt svāsthyakāmaḥ śayīteti. saty api āsīsetyor akarmakatve …… iti siddhaivamādiṣv api sakarmikā bhāvanā. A, 385.6-16; A', part 2, 352.11-22.

- 7) 文法学派の行為論については、岩崎[1992] 参照。
- 8) D'Sa [1980] 101-104.
- 9) Taber [1983] 409.23-24: the verb expresses a *bhāva*, an action (D'Sa translates this term very misleadingly as "an urge to be produced").
- 10) D'Sa [1980] 103: What is worthy of our attention is that the 'cry', the 'urge', the 'demand', the 'exigency' (*bhāvanā*) expressed in verbs like *yajeta*
- 11) Frauwallner [1938] 219.
- 12) A, 370.2; A', part 2, 333.2.
- 13) Cloony [1990] 47.
- 14) TV 2.1.1: *siddhāntavādī tu bhavater ṇijantāt er ac ity ac-pratyaye kṛte bhāvanā-vācinam bhāva-śabdām vyutpādyā. A, 374, 20-21; A', part 2. p. 339, 7-8.*
- 15) ŚBh 2.1.1: *kecid bhāvārthā na karmaśabdāḥ yathā bhavanam bhāvo bhūtir iti. A, 386.2-3; A', part 2, 353.3.*
- 16) *bhavana=bhū+LyuṬ (P.3.3.115: LyuṬ ca); bhāva=bhū+GHaÑ (P.3.3.18: bhāve); bhūti=bhū+KtiN (P.3.3.94: striyām KtiN).*
- 17) ŚBh 2.1.1: *tathā yajeta yathā kimcid bhavatīti. tenaite bhāvaśabdāḥ. A, 375.3; A', part 2, 339.3.*
- 18) ŚBh 2.1.4: *tāny ākhyātānīti bhāvaśabdān paryāyaśabdenopadiśati. A, 388.9-10; A', part 2, 357.2-3.*
- 19) ŚBh 2.1.1: *bhavanti kecid karmaśabdā na bhāvārthāḥ yathā śyenaikatrikādayaḥ. A, 386.1-2; A', part 2, 353.2-3.*
- 20) ŚBh 2.1.6: *avagatam etad bhāvaśabdāḥ karmaṇo vācakā iti. bahuprakārās ca bhāva-śabdāḥ. yajati-juhōti-dadātityevamprakārāḥ. dogdhi pinaṣṭi vilāpayatityevamādayāś ca. A, 405.8-10; A', part 2, 379.6-8.*
- 21) ŚBh 2.1.1: *bhāvārthāḥ karmaśabdās tebhyaḥ kriyā pratiyeta. A, 375.5-6; A', part 2, 340.1-2.*
- 22) ŚBh 2.1.1: *tasmāt tebhyaḥ kriyā pratiyeta. phalasya kriyā karaṇam niṣpattir iti. A, 375.8-9; A', part 2, 340.4-5.*
- 23) ŚBh 11.1.10: *vyāpāraḥ kriyety anarthāntaram. yāgeneha svargasya kriyocyate. yajeta yāgena svargaṃ kuryāt. svargārtham vyāpriyety arthaḥ. A, 3006[2106の誤植].16-17; A', part 7, 13.4-5.*
- 24) ŚBh 2.1.4: *puruṣaśambaddhā bhāvanocyate. puruṣam hi vadati. bhāvayed iti. A, 389.2; A', part 2, 357.11.*
- 25) ŚBh 2.1.1: *bhāvārthāḥ karmaśabdās tebhyaḥ kriyā pratiyeta. yajetetyevamādibhyaḥ. kutaḥ. bhāvārthatvād eva. A, 375.5-7; A', part 2, 340.1-2.*
- 26) ŚBh 2.1.1: *yāgādiśabdās caite bhāvaśabdās ca. yajyādyarthaś cāto 'vagamyate bhāvayed iti ca. A, 375.2-3; A', part 2, 339.2-3.*

- 27) ŚBh 2.2.1: tatra yady api paro bhāgo bhāvanāvacaṇaḥ sarveṣu samānaḥ. A, 466. 6-7; A', part 3, 7.5-6.
- 28) ŚBh 11.1.24: bhāvapradhānam ākhyātam. bhāvanām kasyāpi brūte. bhāvaprakṛtasya sādhanagrāmasyāpekṣitatvād. yajeta kena kimarthaṃ katham iti. A, 3013[2113の誤植].24-3014[2114の誤植].2; A', part 7, 20.23-21.1.
- 29) ŚBh 2.1.1: ya āhuḥ kim api bhāvayed iti te svargakāmapadasambandhāt svargam bhāvayed iti brūyuh. A, 375.7-8; A', part 2, 340.3-4.
- 30) ŚBh 6.1.3: tatra vākyād avagatasya kāmasya kartavyatāvagamya yāgasya ca karaṇatā. A, 1353.4-5; A', part 5, 183.5-6.
- 31) ŚBh 2.1.1: eṣa hy artho vidhiyate. yathā yāgādīnā. svargakāmaḥ kena bhāvayet svargam. yāgādīneti. A, 375.10-11; A', part 2, 340.6-7.
- 32) ŚBh 2.1.4: yāgena bhāvayed iti tu śrutyā. A, 389.7-8; A', part 2, 358. 3.
- 33) ŚBh 2.1.1: yasya ca śabdasyārthena phalaṃ sādhyate tenāpūrvam kṛtvā nānyatheti. A, 375.11-12; A', part 2, 340.7-8.
- 34) ŚBh 2.1.1: yāgādisābdās caite bhāvasābdās ca. yajyādyaṛthaś cāto 'vagamyate bhāvayed iti ca. tathā yajeta yathā kimcid bhavatīti. A, 375.2-3; A', part 2, 339.2-3.
- 35) ŚBh 2.1.1: tasmāt tebhyaḥ kriyā pratiyeta. A, 375.8; A', part 2, 340.4.
- 36) ŚBh 2.1.1: tathā yajeta yathā kimcid bhavatīti. A, 375.3; A', part 2, 339.3.
- 37) ŚBh 2.1.1: yasya ca śabdasyārthena phalaṃ sādhyate tenāpūrvam kṛtvā nānyatheti tato 'pūrvam gamyate. ato yas tasya vācakaḥ śabdā tato 'pūrvam pratiyeta iti. A, 375.11-376.1; A', part 2, 340.7-9.
- 38) ŚBh 2.1.5: apūrvam punar asti. yata ārambhaḥ śiṣyate svargakāmo yajeteti. itarathā hi vidhānam anarthakaṃ syāt. bhaṅgitvād yāgasya. yady anyad anutpādyā yāgo vinaśyati phalam asati nimitte na syāt. tasmād utpādayatīti. A, 390.1-3; A', part 2, 358.16-372.1.
(下線はストロラ本文)
- 39) ŚBh 7.1.3: satyaṃ śrūyate na tu tad [=phalaṃ=svargaḥ] yajinā kriyate. vinaṣṭe yajau tad [=phalaṃ] bhavati. apūrvam tu tena [yajinā] kriyate. tasmāt tasya kartavyatocyate. A, 1529.1-3; A', part 5. 381.1-3.
- 40) ŚBh 9.1.3: tad api hy apūrvam śabdād evāvagamya. astīti na prāk śabdād anyena pramāṇenopasaṃkhyāyate. A, 1646.11-13; A', part 6, 68.16-18.
- 41) ŚBh 2.1.1: tena bhāvasābdā apūrvasya codakā iti brūmaḥ. na tu kaścic chabdaḥ sāksād apūrvasya vācako 'sti. A, 376.1-2; A', part 2, 340.9-341.1.

(参考文献)

- 岩崎良行 [1992] バルトリハリノ行為論, 『印度哲学と教学』7, 67-100.
黒田泰司 [1979] Kumārilaのbhāvanā説について(1), 『印度學と教學研究』28-1, 458-456.

- 黒田泰司 [1980] Kumārilaのbhāvanā説について(2), 『印度學仏教學研究』
29-1, 441-436.
- 川上真一 [1994] クマーリラの文意論, 『南都佛教』69, 57-82.
- D'Sa, F. X. [1980] *Śabdaprāmāṇyam in Śabara and Kumārila, Towards a Study of
the Mīmāṃsā Experience of Language*. Vienna: Publications of
the De Nobili Research Library.
- Frauwallner, E. [1938] Bhāvanā und Vidhiḥ bei Maṇḍanamiśra. *Wiener Zeitschrift für
des Kundes Morgenlandes* 45, 212-252.
- Mazumdar, P. K. [1977] *The Philosophy of Language in the Light of Pāṇinian and the
Mīmāṃsāka Schools of Indian Philosophy*. Calcutta: Sanskrit
Pustak Bhandar.
- Taber, J. [1983] Review of *Śabdaprāmāṇyam in Śabara and Kumārila: Towards a
Study of the Mīmāṃsā Experience of Language*, by Francis X.
D'Sa, *S. J. Philosophy East & West* 33, 407-10.

1995.7.17 稿

かたおか けい 東京大学大学院博士課程

Action-oriented hermeneutics:
Śabarasvāmin's concepts of *bhāva*, *kriyā*, and *bhāvanā*

KATAOKA, Kei

This paper tries to elucidate Śabara's concept of action in comparison with Kumāriḷa's *bhāvanā*-theory by analyzing the relevant portions of the *Śābara-bhāṣya* and the *Tantravārttika*, especially those on *Jaimini-sūtra* 2.1.1.

The introductory part of this article refers to Kumāriḷa's definitions of three concepts, *bhāva*, *kriyā*, and *bhāvanā*, to show that he demonstrates the primary function of *bhāvanā* (the action of causing something to come into being) in the Mīmāṃsā system of hermeneutics through differentiating among those three concepts and clarifying their mutual relation in terms of three classes of verbs, i.e. intransitive, transitive, and causative: *kriyā* (*prayojaka-vyāpāra*) + *bhāva* (*prayojya-vyāpāra*) = *bhāvanā* (*upasarjanībhūta-prayojyakriyaḥ prayojaka-vyāpārah*).

The analysis of Śabara's arguments consists of the following two points. First, the examination of Śabara's use of action-words occurring in *Jaimini-sūtra* 2.1.1 and his commentary on it reveals that he makes a clear distinction among the three terms, *bhāvārthāḥ* ([the words] denoting the function of coming into being), *karmaśabdāḥ*, and *bhāvaśabdāḥ* (=ākhyātāni), in accordance with his interpretation of the sūtra. The present writer proceeds to contrast his understanding of the sūtra with that of Kumāriḷa, according to whom the "bhāva" in the sūtra is nothing but a synonym for the "bhāvanā." Thus Kumāriḷa bases on this sūtra the view that verbs denote the *bhāvanā*.

Second, the present writer investigates Śabara's idea of the role that the elements, *bhāva*, *kriyā*, and *bhāvanā*, play in the world of rituals and the interpretation of Vedic scriptures. For example, a Vedic injunction "*svargakāmo yajeta*" is paraphrased into "*yāgāt svargo bhavati*," "*yāgena svargaṃ kuryāt*," or "*yāgena svargaṃ bhāvayet*." Accordingly, Śabara treats all three as the central element which corresponds to the concept of *kriyā* in *kārika*-theory, without discriminating among them.

On the basis of the above study, this paper makes the following concluding remarks: what seems to underlie Śabara's idea of *bhāvanā* is an attempt to read from the Veda itself the ultimate purpose of ritual acts-- that is, heaven. It is quite possible that for this purpose he has invented the *bhāvanā*, a concept that was not found in the action-theory of grammarians (*vaiyākaraṇas*). But he does not give a definite answer about how it is understood from the words of Veda, whereas Kumāriḷa attributes the power of expressing it to verbs.